

日本人の桃

大須賀 正央

夕方のいつものローカルニュースを見ていて、不意に胸を衝かれた。

画面にはタイのあるスーパーの店内が映っており、桃を手に取った現地のまだ若い主婦がインタビューに答えている。タイ語だから言葉は分からないが、凜とした表情で淀みなく話す彼女の口跡に重ねて、字幕がこう説明する。

「ええ、少し高いですがとてもおいしそうですし、日本人が大丈夫と言っているなら安心ですから買って帰ります」

手にしているのは大ぶりの、日本円にして一個600円の福島の桃だという。収束というにはほど遠い放射能被災地フクシマでは、故郷を追われいまだに耐え難い日常を強いられる十数万の人々がいる。県民の誇りだった米も野菜・果物も、去年はまともに作れず出荷さえできなかった。

自ら田畑を除染し、果樹の樹皮を洗い、桃を、ようやく今年は胸を張って市場に並べることが出来た。しかしフクシマの産物は何であれ、国内でさえ需要は回復していない。基準を満たしたから輸出できるといっても、実際に受け入れられるのか甚だ疑わしいという気持ちは、生産者自身にさえあつたろう。

あれから一年半、国の対策も当てにならず、他県の人には想像できないだろう忸怩たる心情を抱え、フクシマ県民はこのまま孤立するのだと諦め始めてもいた。早秋、その福島の桃の初物が海外に渡り、かの国の主婦の心に届いたというニュースだったのだ。

福島県にとっての久々の明るい話題。そして別のもう一つの意味でも、私ははっとさせられた。「日本人が大丈夫と言っているなら安心です……」。タイ人の主婦は、揺るぎなくこう言った。

その揺るぎなさは、日本への絶大なる信頼感なのだと思う。隣国との国境をめぐる軋轢にめげそうな昨今、奮い立つものがある。思い返せば高度成長期の初期には、海外で日本製品はサルマネだと嘲笑されていたのだ。反論の代わりに、誠実に努力を重ねた半世紀の日本は、そして福島のこの一年は、本当によくここまで来たものだ、と。